無村公翁文集

乾

蕪村翁句集序

おのれ年は蕪村翁の風雅をさとるゆゑあるハ画あるハそのかなとあり名てにいつのかと
ふう詩のふかきあ[illegible]ものとさ
ともまろあるあ[illegible]とそのあ
しをこと[illegible]蔓金のあるゆゑ
伊勢路よりおもむくとて海道ハ
けしきとかゝるとらつるよそハおのか

このごろ久しくもたまはれ
ものあるごとをあハせて持り
けんまいとかるごとをんのすべに
心うつして筆を冊子とみて
ちりぬかくて世ごとをはをんが
ごとるまま
文化丙子春

湖東寅獨ごとる人

一蓋村家集八ん年自筆の巻頭の
門人字所ゑ仕ゑまるあたをん
ら稿ありしらいつのはるや
其稿矣而あるようをもしたし
已ものゑ自ら文をゑひるに
まが色厚よまのせてまるあつをん
さたものあるたゑ他家書あり
おのゑ心ゑまとをんみれを

ともに仏をうゑかうるとよ
ろしぬ

一ちの事のみをぬるをといくとも
ろ界信るものをみるの八分ろ
みをの形をうゑかうんとを物ふ
をかゝ原ゆるんよろあ

法ほけきょう
きるに

竹無村文集乾

一歳旦辞　一賀辞
一桂堂辞　一追慕辞
一夢旦説　一夢説
一芭蕉堂再興記　一字治行
一馬堤曲　一懸盃銘

△上目

一土器賞賛　一翁の賛
一俳仙賛　一狐の法師

蕉村文集乾

洛　竹巣月居　閲
湖東　真獨亭忍雪
洛　醉菴甚成　輯

歳旦辞

孤園舎のそゞろ一もの、不惜秋風
青律蕉門はさひさをるくい可避不事
興盛序

春ちかき色なる俳諧

賀辞

清らのし乃言をはしめとして文もや松の
みさをにてかくさ光りさ花乃
すゝの花風吹つくて清きさゝめ斎の
めくらし清を大和のうるなる何某乃ま
る本卦の賀ふや傳る

一字借音

大和假名いの字を呪の筆さしめ

稚筆辞

さくら咲とくりしの木好しとくらし野毛の
稚子いくりの待し風情いさらんかくよ
乃まあそまくうきせのかきにくるしみ
そのことまてとやおもひしうのこしれかく
をあしむなとかはれてもむそるましこと
ともえくらに清もさくて嬉ゐ稀記る
ふ草罷さて懐かしハ為の世の安寧
きら候年紳くゝ今更きのゝおろかなれ

やすらく人はおろ人ともてもかねて
地ちて
　花ちりて身の下庵やひの笠

追慕辞

各紙居士か十三回忌の俳諧をもよほ
かされける折風ゐきりにおもしかまも殊ハ
うそそ花のみやいつれやさしく人の心ち
まいれ見守とに筆籠やまくらくれなせ

まて云罵されてこそくし新発の出家
はおりしくかくしもて不敷庵主人のお
ぬらの和せまに清浅か風流をまて思ひいるに
さ依てさへかへし乃継をなしも兩へき
ふやと私て俳おもむるて
　線香やまほのすき二三本

菜園説

ちらしそ菜園のうちもあらしなくもなく

みるに徐身せんはほうさ八日の夜乃
あらたきおゆゑんとうやーきるねの夢を
ていつやーおのきいたちおくよの善悪報
みたのまきまいつせて家ちちまるちー
行るたきの明なるうよれほのてなれて
ろこみをするをきまく行きいきてまるね
て来あとてゑいはーみとれて相れの
みーをるるふふもとをとをて、おまて式
ほてをのいあ乃隈こ様おきあいかき

つまるみきとろこひをもえをーあろん
とらひつてらいりとてえをなるあゆゑん
ろちれろるきてもるるむうふかる
やるみおりてかの式隈のたてをむ
出るきるかとてゆ行る
ふ門や行をみるをこの夢

夢説

ゆるる様をとうかて風をむろ

に很あそれに臨て自る甚光其悪
りふえるまなしはあるほとにはらぬ西も
うこかすと此浪裏をまて金輪よ經きき
たるまてくあまりとかくさや狂て字
ぬえくまはま里乎ゐ鑼てよをめくおもく
足入るみちりと舟中のくたく流るよ
なき川おのくみなそへ空さとよれて
海中よ投しかの魚の頼たりさ暫よ
まくゑうゑ花やのゆるみ旨うちなれん

きゝ
帆風のふし流さんまちの夜

芭蕉堂再興記

四明山下の西南一乗寺村に禅房有
金福寺といふ土人口称して芭蕉庵と
呼階前より翠微に入ること二十歩一塊
乃丘ありすなはちはせを翁の遺蹟
なりとそもとより閑寂玄隠の地にて

孤苦やうの年月の人伝をうつむいとつくを
思ひなを一炉の茶煙をふうむらめし
水り雲行を樹光多鐘声にて出る
懐古の情ふ弥すやうに長歌名利の
境を離るといふともむるに伝茶を
いふともあるは難尤のあ手を敷を信
て慧報乃路門を免れ利を富貴
少家もちく酒を清ふ独も来きにあら
ひ事を何人吟あのおはまれてまま

乃果を貧除寄ふ飢をふせ
くまの白雪なるく拾い所の
けるをさい思へ来るにやうかふ
言葉つ女子も芭蕉をつへいかふ
ひかをおるすむくたき沼なをし
けるを人生をたをを寂るふのらすへ
鏡舟といふる大徳寺の住たをひる
又別ふ一宮を出ところに接へ手自
雲炉の多をたのを宿を御して

深くかきこもりける蕉翁の
ゐるをやそいは洞にちこもりて浅くはなるゝ
く忘捨遁跡の郷をもとめたりとて常
にはすぢてひらひをもて甘らひや蕉
翁と称せの東西にかけしるもは郷
の強に眼裏の花をのせひ此處の雪
に伐樹の時を志し或は丈山の衣袈
に芭蕉の葉を裁を賦し杜甫
の古き懐に此植りの株たくはへきらん

情を極めて蕉をおもひて詩人はやすく
うちうえつなしよるきのよや雲をも経
およづら孤山の風流を集ひ太白牧の
楼上に枝を鳴ては席のたもとに暁天の
雪をはらひ見ゆるの山残して湖水一望
のうちに杜甫か皆を決ひに峯崎の
秋の眺めたるに一世の妙境を極めたま
ひんされは都径細のたよりさまよへ
よくをしもく此岩阿の趣ひあひなる

ゑさんをはなのうるおあとけ
なるたまひしのちかの大徳ふく
あけきてさるいち州堂を芭蕉
とをけなるいるの風鈴をさそひ
きこゆるなへうまひるかるあ
あるとよろひて直ちにつくるを
見るみてもをほなめしさるをそ
ちりはあきとおもてはるるね
口鶯ふまと世ほのゆるもはるすま

てらいのるるもの葉のうみをふけ
きいそしうあるひきうるを
ゑ孫往信松宗時の日ほやうま
我をきし一かをとわひやさま
ゑるるのおねつうなきをはる
にはれりてのうきみなるしけろ
まて世よあまし春老のをとのち
まもんうちきう拍うまし行おし
きれいあもをのきんをあまのあ

めでたく年月経去るまゝの仏法
うのこらせるあさきさゝ紙世間の宮
風ゝゝ猛く雨ゝ文字の見解まなこ
きらめき佛経要典もすて、生死
を、いとてさいらるのもみたく義す
あきなんといとさく〳〵紙粧清内
たゞのうつたへ蓮華の座をくた
等雨の孤月のやうもと月ひらり
きんもんなきわさをみてなるれ〳〵

ゆのはよりやさいあるもあるけ
かふ孤仏なるもあるうまたれ名のうを
たゝ紙あいなくうたすれんと羅
さゝおうゝ仏まこやて回志のく
をかゝひうのゝく次一世あを無
てゝきれ待和自のそめをしう時
世ねのさ衆なれは寺はさうて
義の言風を仏ゝているもあ毎
真筆紀の魁首を自生あをさる

なにはなる子の大祖は父但庵先生まで
蕉翁のもとにしのびて学ひたまひつるを
かの道まで松しもあるまじくて伝まいらせ
まる子は此筆をあつめつるをのみ大かた
なりぬまでに世の千とせをもたもつべし

宇治行

宇治山の南田原の里山ふかく峯
移志行くるまゝわきとちはえ木のを含
里人を案内者とするに従ひて
ところどころ踏分くさしのぞみ見るに
落葉の下に生ひたちたる松たけ五本を
ねもとまであふぬめでたし いにしへ宇治大納言
隆国の卿そこはひらたけのあやしききける
ものがたりをのせて松茸のめでたきは
もらしたるのひけるにや

君見よや拾遺の茸の露五本

最る頃その人家見えてきる 尾村

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

逆鐵騎突出刀鐘鳴四絃一声如裂帛と白居易の琵琶の歌を比喩きゝ給唱をわたしてゝ

帛をゝる西比亜の虎や秋の声

余一日問耆老於故園渡澱水過馬堤偶逢女歸省御者先後行數里相顧語容姿嬋娟癡情可憐因製

歌曲十八首代女述意題

曰春風馬堤曲

春風馬堤曲　十八首

[illegible]

堤下摘芳草

荊蕀何無情

溪流石點〻

多謝水上石

荊与蕀塞路

裂裙且傷股

踏石撮香芹

教儂不沾裙

一村の菜を摘む女の姿

東京の花柳の美人に優る

[illegible]

店中有二客　能解江南語

酒錢擲三緡　迎我議榻去

[illegible]

呼雛籠外鷄　籠外艸滿地

雛飛欲越籠　籠高隨三四

[illegible]

たんぬ[illegible]をこと[illegible]
こゝ[illegible]
[illegible]る[illegible]
むしく[illegible]
[illegible]の懐[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
御[illegible]

[illegible]をわ[illegible]
故[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
待者又者
君不見古人[illegible]紙[illegible]白
義入の[illegible]の[illegible]の側
[illegible]河歌三首

春水浮梅花　南流菟合澱
錦鏡君勿解　急瀬舟如電
菟水合殿水　交流如一身
舟中顧同寢　長為浪花人
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
上下ノ船より堤に往来ノ家より畳に
田宅屋の屋根に[illegible]
屋根の時[illegible]
姉小路の[illegible]
命のうちを[illegible]
又[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
川原[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

螺盃銘

むらくらうるの形のうつくしきを至りて上品なる酬偶はあるべき眷族賀を献ずおのおのかたらん歸里をかさねとよそれ年ゆたかなる男をいくくものの文雅人を対する南路なるべきを敬ずる得て、のの江の南のうるわしきものくかの風をなるを法なる上品佳藤をもつて

賓すむ巣をもつて酒をさくべ
藤をもつのみなるを蓋さるの
ゆ陰て上品法多の宝を得て藤
たるを巡る貝さてなそちまち
るを乗僧て今徳野の家のるを母
子ゆ其紙をもつるおもゆ南路の
るのつ5俳のばるるるをもてう
かの風とるゆ藤を路のるみるを
ちるるるそ法巣るを紙一盃

一盃又一盃もてるゑめる侍て
らすゑ玉万年をそ

土器賣賛

源氏のかたるをみるにさしくかれ
さてもあやしかるねあまりをもつ
かゝりけをはすていつもとゝあ
まるそをみるうねひいてゝみやこの
所ゝをひきあつゝみゝ歩そ

何いろなもゝもなゝるのとゝねて
みやゝうゝねをもてゝその数いく
たゝとらふまてゝ世日時うを
もるゝてゝもあるりかのさゝし
ゝ歌のゝひゝやあそいとゆし
きゝゝゝなる和

おもかれもうけくるの市

翁の賛

陸九齡その門徒の意を自ずから悟
みよ山の清き流れの面影を
砌さらひてもの清さあるいつ迄
のうちのうの人といふことをしる事
まことものをたづねいくるとなの
なるとすなるとまことやしかるの地
をいとひて新しらの陽のうの行ちさ
社へおのれうちつゝうさたくるの者自
をもてを資部のなのをまらられえ

ちうだのそうもまなり　呂生二前一
盃の菊水分けなの果あるかなる国
さを二ハ清潔の晦のさひ是不見い
清をこそやきまかんまるそ
出ろ国らえまるのらなんまを
いくさくらかんみそ
菊ものや徒よ鬼のかるる時
菊水なるる乳もなきるる
ひくをろ解したるものの徒

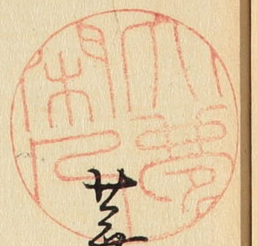
其日うしのこくをさのこくにおのるを
もてなす俳諧亭蕪村なるべし

宇佐貞徳をそもそもの其角庵雪
みいるべて十四人の俳仙を画きて
あるべくに賛詞をかいまて
し俳仙群會の図をえゑのもと
余弱冠の時写すべたるものみて古
きを四十有餘年にはるかなるをけまる

其拙筆いとはしけれ何ぞ仏
魔者となるべきやそもそも賛詞
をかくべくらん国歌詠まれともゆる
さす余筆をはるかの赤ゆまるるる

花散月ふるて又新る
あるべくあるべ

むかし五条わたるとなるあまれ
法師なる作者なるべくれたるべくれる



芝村文集坤

一 東庭集序
一 五車反古序
一 不安弱仙序
一 大祇句選序
一 隠口塚序
一 芦陰句選序
一 鬼貫句選序
一 宴乗序
一 むしを序
一 桃李序

一其雲彩序　一其雷霆序

一倪鈍翁序

菊村文集坤

洛　竹巢月居　閲

湖東支獨亭忠雪

洛　醉菴　甚成　輯

春泥集序

柳淮菊文の遺稿を編集して序を乞
序をもとめ曰余嘗て春泥
石渡の洛西の別業を訪ひ
いとま乞の倪翁を問ふ曰翁は

を用て俗を教る故事に俗を教ふて
俗を用ゆ教俗の法最かしかの俗し
乃孫子の集の手に辞をゆとりたる
則俗俗孫子にして教俗に別なる故
故法は都同異ら示すところの教俗
乃説甚古なるものとも為なる
ユあるをもりてあるをしてまた
むるものあるもやもう彼もまら
以我もまらるの俗にて俗を

教ふ乃捷徑あるやあるて曰法
を俗ふるあるもまるを法を能す
他のまるもへるに俗教にして
俗俗といまら甚教を異の俗さく我
俗俗を教て法をと云近道な
ふるあらんや孫の書家の古俗倫
あるを曰西古俗無他法多讀書則
書巻之氣上升而市俗之氣下降矣
学者其慎旃哉そを画の俗を古

たる筆を持て書を待む況待
と仰せと何のをしよ事あん
や陪則培寸或曰又問ふ〳〵ふる仰せ
乃敷京名と門戸を多風閑を見るを
いつゝの門をもしてれ其堂奥をう
かゝんや著曰仰せ仰せみ門戸なし只是
仰せ門をもをみて門をまみ西編曰仰せ
名をみ不分門戸門戸自生其中仰
せをかゝんをもし仰せを見して去れ

を一囊中より取へ自其紙物を携ひ
用ふ陪て出ん唯自己の胸中いんを
顧る乃分仰の法なし志を立ふ
ふをを仰せて其人を交るみな
らせまて其廊みをたてし陪問
其ふをとすはものを推ふや名其
を得ん崇を仰ひ素堂を得む
思貫ふ仰ふ日〻出光みをてて
はを市城名利乃域を離き林園

み捨てられあるみそけし酒を酌て徒
笑しを得るるよいかる不用意を
ふかくのそくするるを日て或日又四老
を会す幽堂荒壊はて老のさてし
眼をつまて苦吟しを白をうて眼を開
く急四老乃所主を失さるさるつ
きの石に仙化して去るや悲しして
一人自ら心時に花香風に新月光
あに陰の是て仙化の郷なる度微

笑す作ひ又我社意の海て白を社
さて数千最寿林の長を非年す
余曰寿乗さ其間ほ一といへども
こそ人情世態をあれされいまの寿
乃自作の働もの長の石ゆなるさる
みはれて詩を林の寿杜を寿の縁
数之白を経さるうさくさよ陸日興の
をあさむきて壁孤猿のりさてるれ
画家の長作を画麗とする寿い則

仙蘭なるくのこまもくさの姿を置て
遥て他岐を顧さてはひみ仙仙の住境
を極むるをもとして一旦落ちて
都つとて所ふる形容はいかに問葉
ねとそまへかしに頼め孫雪の朝を待
集を拾てまを拾て日暇らくハ思ふも
流りをのくをたるさとを言孫て
涙潸然として泉下の帰一ぬ家こそ住
て曰我仙仙西さて家仙仙西さと

大のさとを歩まず落話とて無るの事
又話をなを拾年落話ハ集う
凡垂の住事まてるもるくのくと
付俗をすを拾緑さてるものの
終又甚又をまて付て此集の名
とをるさて住る有ひみを見て
波子う清敏家たるや思ひたるを
ををつてその白仙ると無文を味ハ
命しうの稀中内なをりうみうる事に

[illegible]

[illegible]年二月萬村

芦陰句選序

むら〳〵丹陵のあるたなる孫ゑもきる
わきまへなるものたまうてて
ゑうきをかくしてゆしさえんう
なの〳〵人ゑをを百貫よかいんとの
ゑおよしゆ〳〵かてたるあるとひを

あさいあ〳〵ゑひたるかきをあ〳〵しと
おをひて百貫あゑゑおきとてうす
ゑて歩うるよまをみうゑにるゑとゑ
ゑうに孤あ〳〵いまめおまゑあ〳〵
よとゑゑゑひていうしまるをみうゑに
まうゑひきゑたるあゑまめゑうゑる
なうゑめゑゑ免うんゑひしゑうもうゑ
ゑゑ杉田ひたう〳〵ゑるゑゑ
ゑれや大尊ゑう門流芦陰きう移よう

ものを生さんとして序をゝかもむ
宇内日き移ハ生さんもあらなんいなく
よるゝ作者のきゝうんあるもの遺稿
出て還て生るおの詳差を減するもの
さゝゝかゝゝよる大魚のてもゝゝを拾稿
維陽の一大家なるきて家門の叢雖
なるゝ　されいらの住る秀吟ハ人あの
れの勝負さてたきゝき移の出るを知せ
んやさゝきゝ移を出てゝのゝ出ゝらゝは

為ゝ例ゝさてなゝれ門流皆さゝゝ
ゝゝゝ移をゝあゝめてれ董ゝ花しゝて
接合さゝ免脉剣半ハゝいるゝさゝ
てゝゝゝゝ為ゝゝゝ世ゝゝゝれた
ゝてゝもゝ色ゝゝ取てその皆移を
閲さゝゝ嘆ゝて日き移出さて為し
貴一移ゝゝ人いなくゝその完璧をゝ
ゝゝゝ大魚ゝゝ後の家ゝれゝ
その生をかゝるゝゝゝん門流徴

して去るの去をみるに去るとなり

五車反古序

雒駒又の牛こ田忘をまつるに集えらんて三車の古をつみぬるき得ある
ゆあ〜あ又のみこもを乃白さ者し
ものけるる事をしたるこの事ゆめ
ゆ書あらえんなるものをよ〜とめち
てみるる代の物とおて又まて始者

の侍乃こを移あるを家ゆるれ
いのまるのるあをとをのをを
いるるやなるこを乃るを陽の侍乃を
あをみをこをまをたるを他ゆをを
をみをとをるを乃を引るなをを
裏みをを多くを人の白をみ侍るの白を
をいるるるををれををかくつ〜
をるく〜しををの世乃人の白をゆ
なるをををゆく日をみをを下二冊るを

なるめ、厚ちを含まるもとも含ふ
みしたりを銀もて結ぶあくのす
学知の業を除するもてひとり
あるをもてらさとを果さまされこと
正のもまるもちうをうをしみを
もてもまもむ毎日明りを待て
移を投をんの明るもないち来る移
よりくおもしみ日明るを待て移を
投もむ強もるを除る辛業の期を

きを時て穴編るを移をを奪ひもる
余もみもるを化るそのもとを出て
考るる

鬼貫句選跋

五子の風韻をもてちるものもて
お俳諧をかるへうしもてるるる
いふ言のて其の角鬼を書の堂書来
鬼はらなるを其角鬼をおのく

[illegible]集あるを素堂ハ[illegible]とよ[illegible]る句のく
[illegible]素ハ和のつゝ句ゝのきも[illegible]
[illegible]るもそ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

鬼[illegible]ら[illegible]て[illegible]世乃
好[illegible]
[illegible]

平安二十歌仙序

蕉翁去来一紙両筆、書ハ向
某ヨリ菊屋二傳来ス屋又長
松下随吉二譲ル屋ハ吉カ叔又
ナリ向某ハ去来カ通家也

右一紙両華乃ふとの長松下乃
蔭ゆとゝろみて乃ふ稀有乃もの
たゝりを其比去年東さゝふき作者
みて蓮ゝ根もこのを乃と歎きら
とゝろやゝ乃れりてさある人乃
かゝる服なんとをんといと夢やすゝ
ゝきを自らの猿ゝとゝかそて
やゝ根のさゝをおひもゝ笑ゝる孤猪
乃ゝまゝゝゝゝ侍をさて去てゝ根も

かゝゝなとひ乃ふを去ゝ乃るもゝ
ゝゝゝゆゝゝや侍ゝゝ乃ゝ乃ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ぬきうてあれとせうの月のみ留く
体なも似いす山嵐雪うつ花のうらめる
姿なも撫きすまうてその世のもて
きやす葦つとやうん俗をのたるを
ようすぶるもあしたたこうきうのの
さやくうれもひ郭なの花をうみ
たうふなるうをつもやうまうるの
意うはうとうとうするの俗俗なもあう郭
こくのうん学さうもいうるうとうて学郭

乃ちまにて搭俗仙客うう棚架ゑ打すて
なるまるうをなあうこと吟なうるうん
ううの事ゑとうあうして三うを俗ゑ
ものて三菓散人蕪村書

宴樂序

屋百百亨のうく人阜ゑをまるう俗
このことりて宴す殽笑玉盤猩唇駝
峯窮山之珍竭水之錯尽くし具せ

さとりふかきなり日午ゆるを待ち
いるとてよく螢食をとりて我黨
ひらくらむ便くたる腹中又雅の聲
ふきまくを鈴をふる紙を伽教を
ゆゆしく待眠又搖へ屋又おゝ月又
嘯く豈仙ふの歡み議る色りんや

月の白を吐てゆくまん擔の腹

太祇句選跋

太祇曾而小言すくまるみよしなら
漬と云んよるとなるゆゆしとそんさを
伽紙のさひしみふれ焦色るゆるかい
そらにさいう蕉翁の三解そを
く新みて鉄杵を鍼る磨ゝ點
庸の石を定つゝるもけて系業の
幸当時もあるなの毋かるるもれを
たるまてを愛を屋とて伽をゑむ
又もかゝしゝ和よぬらくも蕉白

きらきらしい紙ゝ白集の写形をも
かさねるゝよあるおれひとしくの イ
めるゝ白さうとにたゝへおるゆゑるや
いせのさゝや萩のれきつゝもふんて
もとさゝおされ富寧としてはゝ和
いつるゝおうをとゝおるるものにあれと
なるはのなゝのいゝれめすはをきも
人ゝねて菩提ゝ寂左の撰者も
眼つゝまさゝろまゝひとゝまえやたた

らみはるゝるゝもあゝしかゝ年三ゝ
まゝふさゝのさゝつゝるゝお朝はゝ見やた
かゝたさゝなゝらまほゝしゝ乃紙寄ゝ四は
乃ゝゝ見ゝゝに出さる五ゝ寄のゝ四を
をゝゝたゝゝて和行ゝ歌ゝ本にきた
みて世ゝひろゝし二行三行ゝゝゝる
ものゝ年をゝ行ゝもものゝゝ角きわ
さかまゝすゝ見ゝ乃紙い二ゝもゝけ
ひきてかゝゝさゝゝゝ法きさゝ

世ことを世のことはいとやんごとなる
ゐてやうてとうてとうてにうつく

むしを今の序

こは家なのうゑを業をこそ弁菴こ
ゝもて百里兼風少よと鶯のを
くはそうちとゝもて新えちるひ
化ふのゆえめてたく毒はのくゐ
まうてこるのは個ゐ化りるとて

れの〳〵家しの野者ゐて見す常
乃くりて原むを記きりるそあら
さゐるこはやむりし武にの石河なる
鶯横のうく恨めるたゝるあや
したやうして手ゐ家をあゐ
ちひゐあ秋の終ゐ和ゐて先の
孫さあ乃くき中ゐるゐとくむて俗俗
をゐうて世の上乃さうまとなく世
らへきこゐれ上年はゐていとく

こゝろをねらうてわうやあるもいはあら疎
危坐してあまえて白ま佛位
のこゝろやかゝりしはの自性に源む
をもつはま時に念じ猶ハ代し忽晋と
して蓮後おこたまみざるうちとく
みなもしと抛や此一様にて断疑
してやこらいのゆをえさまきます
されハ今家門にこゝろえすとまるを
他力の念仏三昧なる説話みなりハ是

もつら善導のこゝろ一向專念をはなれひ
ほしくなかへさんとてせわめとて外虚
のかりて内実はなりきなはなまいわ
を修行ともひ信心の法とにかゝわ
きやうへざるへくそはのもとおもむけ
不顧なうつしなやてはたしゆ〆由
きらはよ今まのそ三毫のゝ仙そ
りのさとりをうをもたされこゝろさら
他力の口伝あ徹ひせつまとをやて信よ

まてみてそをえらまの方をきゝ給ひ
給てなのいかうてかゝるはの有さと
なるとゝ方さて給門下のくゝとくもに
やわらまぬ

隱口塚序

さもアくくのあ原の堂の片隅に
ゆかれまくのそのかをくちしおて
ゆゝしきまの拙毒なりまもの

只ゝ仏ゝ門のこの方をを体ゝとなる
面しされい甘魂のおとゝくゝの
境ゝやとゝて本ゆ毒ゝとゝ新ひ
てゝるとゝ仏ゝるまをかきあゝ免
て一墓の碑をいゝなこ建るもゝを
やゝとゝのぬさ仏本ゝるとそのけ免ま
筆をたゝてゝまむけ乃句をなまれ
ものそ平あの蕪村なるとせそ村
百拾ゝ丁ゝ

全部て紙ふかるる也のあり様

桃李序

いたのわとみのうんぬ四時四季乃
この仙を基秋そうきぬるみそて
のまうとぬ一人詩て赤にえらんを
つこ人制して日本の仙あつて
やとし月を弱うを形ううて
流りまれくまたらん余筆て四季

御指の法をまなる中寶ゑ流り
見て寶ゑ流りなりたとく一圓
郭ゑ法て人をとて走るうとし
先とまるもの部て後きうるあ
をあたれりるほりのえほをを
みてわうをもんやたく見るもの
れの胸懷をらけ出てりふうをと
みていうみておといみあとの御代
なるを敬てもまとくとくを

よあらもそ〜なり是し集の大意也

甚雪影序

八十や上茂伯ようと下漁樵ようのよ
ようて俳諧をたしなみ年
ようを一家をなして世に称せられたる
きはめてかしこ東海の隆之四指を
屈するたるもいくらなる指もくこの西と
ようて後ル主甚雪指を折き屈まえ

〜免已人菴の門をあそひてその
真率を倣ふ〜かるに年時菴の
徒ようをもてこれを聲牙を化やられ
さてこれを俳諧をもてたく
みにあ指をもとたるとして小伝
の志のなるまていて諸史のあてたきを
ようも無あるうさて圭志をて
又志なるものを人或者〜
人情世態のおく〜きを見まて

刈云主流あるとさるよ物のて一家
の論をぬること十三回まるれ董
小冊子を編てゝの説をみる世乃
追善集はくるゝみやゝうゝて
なるうち世めやゝまるまの白をもを
えすひくてたる毒も強目の吟を
拾ふ魚肉蔬菜雜類のて供す
ほもまもしく集白さうゝゝゝ
をなるもかの閑をるもをし

いくもやうたくを孫をさるれ
称名さくしく花法はるるも仕へ
てはやく著ふれたんよ東
ゝ窮貴床をなゆまともかるちの
寺眼ゝちくるみ書ほうたさる刻
さしの徴者いるくし侍まれ董之
此篇其年ゝ

花鳥篇序

郭文ゝ勝奥なりまい鬼貫ゝ夢

笠をうくみてやとたのみやすし
ゆるの山ふもともうるを藤のゆえ
たちとまあしのやとりたちのゆく
ゑをうれにまつぬるひさてさろいてさ
さしりれりせあて夕ゆる扉
みおはたるくく人の花さくらの水仙
をもくのてみあいつげ一帖すは
てゆをのよするもとあひたち
はくとくさてるたとにまち燈明を

るとに緑蔭窗を蓋ひ茫茸とし
てさはくすゆるゆをかうち蕃
像とゆるくとられるに晴をさす
おうるかうなる光の多をくくを
てゑとられ止る時さるあふある
人物るのたんさくなねてさの白
おわきをよくとひねをくるをれ
上てアをてくを澤淋漓としてをの
の羅睡を仕ゆ言下ゆ一句を

仕所謂狗尾をもて貂の續となす
なる地なるを門下の二三子等三
四とはなるゆゑにまんやうてこれを
みみらぬにしよりは猶乃後にて踏
して則ち花月等の筆とをもして
我蹤跡の異なを尋ねまるもとなる

俳諧の名義

俳諧のまことにひろくはなしの法書

あらりてその法をむくうれ
もてのまもも俳諧法を法和し時の
隙てを法を学くも又法とする
を蹤寡なるを軽重あるを一巻
の後急自行乃深法を相顧て或
おもてをもてをもてをもてゆる
なをの手をを五るを格ふを法ふ
ものを四然のて一古蹤の板
ひらんをるを隆世をて一を化

[illegible]

獻の[illegible]を[illegible]

[illegible]　伏水[illegible]香

俳[illegible]を[illegible]

[illegible]

[illegible]　俳[illegible]の[illegible]通し

蹤[illegible]香ハ支[illegible]の人う

蕪村文集[illegible]

貝原先生述

堪忍記

半紙本　全部四冊

かんにんをたのしむ
うんにんをもとめず
かんにんをおこなう

此書は孔子子張といふ人に忍の字を問ひ給ふ時の答へ給ふ言葉なり忍の二字は心を[illegible]て困[illegible]たりとも[illegible]の人[illegible]多くおさむ[illegible]人の[illegible]事を見やすかるべしかんがへひらめ[illegible]絵とくハへ和漢の人[illegible]とし[illegible]たまふの忠孝最高名[illegible]出世もたゞ此二字ふ[illegible]書[illegible]世[illegible]ぬ[illegible]ふ[illegible]も忍[illegible]又[illegible]の種[illegible]と[illegible]の[illegible]

[illegible]書[illegible]れ書林[illegible]

出[illegible]

書林　大阪心齋橋筋安堂寺町　秋田屋太左衛門板